

雑誌『美術新報』が提示した同時代美術・美術家像 ——1909年から1915年の作品・作家批評を手がかりに——

日比野未夢

はじめに

雑誌『美術新報』は、画報社が1902年から1920年までに刊行した日本最初期の総合美術雑誌である。岩村透（1870-1917）が顧問格を、坂井犀水（1871-1940）が編集主幹を務めた1909年から1915年が最盛期であった⁽¹⁾。この背景には1907年から開催された文部省美術展覧会による作家、美術愛好家、鑑賞者の増加があった⁽²⁾。同誌は、美術に関する最新の情報を仲間内の余興のような企画をまじえながら提供し、刊行当時から熱心な読者を獲得していた⁽³⁾。編集部員たちは、自分たちの雑誌の同時代的な意義のみならず歴史的な史料的価値を自覚し、合本を前提に編集をおこなっていた⁽⁴⁾。

近年、朴昭炫⁽⁵⁾や今橋映子⁽⁶⁾が『美術新報』を研究対象に成果を上げている。朴は、『美術新報』とその姉妹雑誌『美術週報』が、近代美術館建設運動を言論面で支えていたと指摘している。具体的には、雑誌が打ち出したスローガン「美術家自治」のもとに芸術家らが団結し、自らの権利のために動き出した実相を捉えた。一方、今橋は、『美術新報』顧問格・岩村透や編集主幹・坂井犀水が傾倒したキリスト教精神や初期社会主義思想に留意して、彼らが美術と社会に関わる問題を提起し続け、そしてその解決を目指して運動を展開した諸相を探究した。例えば、同誌巻頭言「時言」の精読をとおして、1910年代の思想弾圧や言論統制の状況下にもかかわらず、同誌が官展に規定される当時の美術概念に対して異議申し立てをおこなったと指摘している。したがって、同誌は同時代の美術を報道しただけでなく、理念をもって批評を展開した媒体でもあった。

しかし、管見の限りでは、『美術新報』に掲載された同時代の美術作品・作家に関する記事は未だ包括的に検討されてはおらず、掲載情報が個別に参照されるにとど

まっている。そこで、筆者は、同時代の日本における美術の動向と照らし合わせて、同誌が展開した作品・作家に対する批評を改めて検討する。具体的には、同誌看板連載から、新帰朝者として論争や運動の渦中に身を置いた作家・石井柏亭（1882-1958）、南薫造（1883-1950）、山下新太郎（1881-1966）の特集記事を精読する。なお、分析に際しては、同誌顧問格・岩村透の思想に対する先行研究の考察も参考にする。

1. 雑誌『美術新報』と文部省美術展覧会

まず『美術新報』が文展をどのように捉えていたかを検討する。検討の目的は、同時代の日本美術界に対する同誌の認識を明らかにすることにある。

岩村と坂井犀水による『美術新報』は、毎年10月に開催される文展の翌月11月号を「文展特別号」として刊行していた。筆者が注目するのは、初めて「文展特別号」が刊行された際に同誌のナンバリング方式が変更された点である。同誌は1902年3月30日創刊号1巻1号を起点に毎年3月に巻が繰り上げられてきた。しかし、岩村と犀水が編集部を担った後から毎年11月に巻が繰り上げられるようになった⁽⁷⁾。この点から、岩村と犀水が、文展を日本美術界1年間の集大成だと考えていたことがわかった。

とはいっても『美術新報』はただ文展を賞賛し宣伝する媒体ではなかった。巻頭言タイトル、例えば「活社会に接近せよ」⁽⁸⁾「審査委員の人選に就いて」⁽⁹⁾「審査を会議制に改めよ」⁽¹⁰⁾「姑息なる文展の窮策」⁽¹¹⁾「文展と作家の覚悟」⁽¹²⁾「文展会場新設要急」⁽¹³⁾からもわかるように、文展に対する具体的な問題提起と改善提案を繰り返し主張していた⁽¹⁴⁾。そのなかで同誌は、文展を中心として日本のアカデミーを組織することも提案した⁽¹⁵⁾。

以上、第1節では『美術新報』が文展を同時代の日本美術界の中心とみなし、アカデミー設立の基盤になり得ると考えていたことを改めて確認した。

2. 日本美術界における潮流変化の兆し

次に1910年ごろにおこった日本美術界の潮流変化に対して『美術新報』がどのような態度を示したのかを検討する。

1910年に開催された第4回文展出品作品から当時の美術界の傾向を簡単に確認しておく。当時すでに審査員であった黒田清輝(1866-1924)は、樹木や草花を描いた《荒苑斜陽》(1910、カンヴァスに油彩、133.1×84.8cm、似鳥美術館所蔵)を、同じく審査員であった吉田博(1876-1950)は《溪流》(1910、カンヴァスに油彩、119.0×149.0cm、福岡市美術館)を出品した。どちらも自然景観を写實的に捉えた作品である。一方、新帰朝者である南薫造(1883-1950)は《坐せる女》(1908、カンヴァスに油彩、112.1×83.3cm、広島県立美術館)を、同じく新帰朝者・山下新太郎(1883-1950)も屋内で椅子に腰掛け佇む西洋の女性を描いた《読書の後》(1908、カンヴァスに油彩、89.8×62.3cm、泉屋博古館分館)を出品し、ともに3等の評価を受けた。これらの南と山下が留学先で描いた作品が日本美術界の潮流変化のきっかけとなった。彼らの画風を文展に認められた新しい画風として模倣する者があらわれはじめたのだ。

新帰朝者によって日本にもたらされた外国の最新美術潮流の影響が高まるにつれ、総合美術雑誌である『美術新報』は新しい美術潮流に関する報道を強化していった。例えば、ドイツのシトゥルム社と日本の芸術家団体・国民美術協会による「未来派、立体派、木版画展覧会」⁽¹⁶⁾について特集記事を掲載した。本記事は、編集部員のインタビューに対する展覧会企画者・齋藤佳三(1887-1955)の「(後期印象派は)今はその途中である。その途中にあるものを一概に退ける事は出来ないと思ふ」⁽¹⁷⁾という言葉も紹介している。この展覧会に協力した当時最大規模の芸術家団体・国民美術協会と『美術新報』関係者の重なりをふまえれば⁽¹⁸⁾、本記事担当編集部員も上記の齋藤に共感していたと推察できる。このことから、『美術新報』は後期印象派を否定せず、その行く末を見届ける姿勢であったと考えられる。この『美術新報』の態度は、先行研究で今橋が指摘した同誌顧問格・岩村の前衛芸術に対する慎重な批評態度にも通じる⁽¹⁹⁾。

新しい美術潮流への評価に慎重な態度を示しながら報道を続けた『美術新報』は、

日本国内にあらわれた新しい画風の模倣者に対しては「滔々たる随従者が、徒らに新を追い奇を狙ふの陋風は甚だ感心しない」⁽²⁰⁾とときっぱり苦言を呈した。また新帰朝者や彼らの持ち帰った後期印象派にすぐに反応した若手作家らに反して、新しい美術潮流には傾倒しようとする文展審査員への不満からおこった洋画部二科設置運動については⁽²¹⁾、運動の首謀者が二科が設置されなければ文展出品を見送る旨を表明した点に対して「脅迫に似たり」⁽²²⁾と厳しく批判した。しかし、若手作家らが運動を起こさざるを得なかった背景にある言論が成立しない日本の文化的風土の問題を指摘した上で、彼らそのものに対しては「気の毒に思ふ」⁽²³⁾と同情も示した。

以上、第2節の検討から『美術新報』が、日本の美術界が後期印象派を受け入れるためには時間をかけて議論を重ねる必要があると考えていたこと、そしてそれが十分になされないまま日本における美術の主潮が新しい美術潮流へと流れていくことに忌避感を抱いていたことがわかった。

3. 渦中の作家に対する批評

『美術新報』の作品・作家批評の分析に入る前に1909年からはじまった「生の芸術」論争と1911年ごろの「絵画の約束」論争について簡単に確認する⁽²⁴⁾。日本美術界の潮流変化の背景には、この二つの論争があった。「生の芸術」論争とは1909年からはじまった芸術批評の基準としての「生の芸術」と「死の芸術」をめぐる論争を指す。高村光太郎(1883-1956)と石井柏亭(1882-1958)の議論を発端に5年という長い期間をかけて芸術批評の基準そのものを問い直す論点が導き出された。「絵画の約束」論争は1911年ごろに山脇信徳(1886-1952)、有島壬生馬(1882-1974)、武者小路実篤(1885-1976)ら「白樺」派と、批評家・木下杢太郎(1885-1945)を中心におこった。作家の個性は、芸術表現においていかに達成されるべきかをめぐって議論が展開された。

以上をふまえて「生の芸術」論争、「絵画の約束」論争と同時期に雑誌『美術新報』が巻頭連載に掲載した作品・作家批評の精読を試みる。掲載順に1910年9月「現今

の大家（九）石井柏亭氏⁽²⁵⁾の分析からはじめる。筆者は、記事執筆者である坂井犀水が、柏亭に対する作品・作家批評のなかで「生の芸術」論争に対する自らの立場を示した点に着目した。柏亭は「生の芸術」論争において、特定の土地の固有性「ローカルカラー」を描くことの重要性を主張していた⁽²⁶⁾。この主張に対して、犀水は具体的な理由を挙げることなく自らの考えが柏亭の主張とは異なることを、柏亭に対する作品・作家批評のなかで強調した⁽²⁷⁾。犀水は本記事執筆より前に高村光太郎の「緑色の太陽」を誌面に引用しており、「生の芸術」論争において柏亭より高村光太郎を支持していた⁽²⁸⁾。

坂井犀水は「生の芸術」論争へ直接参戦、介入する記事を『美術新報』に掲載することはなかった。その代わりに、柏亭を特集した看板連載のなかで論争における自らの立場を示した。このことから、雑誌『美術新報』看板連載が当時の美術界に対する意見表明の場として機能していたと考えることができる。

次に1912年1月に掲載された「新時代の作家（一）南薫造氏」の精読を試みる。まず連載タイトルに着目する。「現今の大家」から「新時代の作家」に改められた。シリーズをまたいで連載を担当した坂井犀水は、本記事冒頭で「格別深い意味がある訳ではない（中略）今ま現に我等が棲息しつつある時代を、仮に称して、新時代と言ふたまで」⁽²⁹⁾と説明している。犀水は、当該期の美術潮流の変化に対応するべくタイトルを変更した。続けて犀水は1912年当時の西洋画界について「ようやく個人の特性を發揮するの傾向が著しくなつて来たと思ふ。記者は其傾向を歓迎する一人である」⁽³⁰⁾と述べている。一人称は「記者は」となっているが、雑誌『美術新報』の編集主幹・坂井犀水が年明けの看板新連載の冒頭に書いたこの言葉を、読者は雑誌『美術新報』の立場表明と受け取っただろう。

作家・南に対しては「滔々として流行を追ひ、模倣を是れ事とする作家の多い中に、飽くまで自家の真面目を保持して、基本領を枉げない氏を尊重する」⁽³¹⁾と、先の柏亭と同様に「模倣しない」点を評価した⁽³²⁾。しかし、坂井犀水は本記事で南の作品の歴史的な、あるいは同時代的な独自性を分析してはいない。南の作品に対しては「一種基督教的な－特に無邪気な旧約的な精神が、籠つて居る」⁽³³⁾と感想を素直に書くにとどめた。当時、南はすでに文展で評価された新帰朝の作家として美術界内外で認

知されていた。犀水はその南をあえて「模倣しない」作家と評価し、南の画風にみられる外国の美術潮流からの影響を無視している。この批評は海外の最新美術潮流への接近を目的に南の画風を模倣する作家に向けた、犀水からの警告だと読むことができる。

雑誌『美術新報』看板連載が当時の美術界において意見表明の場として機能していたことをふまえて、本記事を振り返る。坂井犀水は、従来とは異なる新しい画風の作家を特集することを目的に新連載を開始した。その第一回目で新帰朝者の南を具体的な分析をすることなく「模倣をしない」作家と評価した。筆者は、犀水が本記事をとおして、外国の最新美術潮流に対する短絡的な画風の模倣や表層的な追従を戒めようとしたと考える。

最後に1912年9月に掲載された「新時代の作家（七）山下新太郎氏」の精読を試みる。坂井犀水は、本記事冒頭で山下の画風について「今日の洋画界の風潮に於ては、決して斬新奇抜派に属しない、寧ろ穩健なるものである派手やかと言うよりは寧ろ地味に近い」⁽³⁴⁾と紹介した。犀水は、山下の画風にみられる外国の美術潮流の影響について、南への批評と同様、あえて触れていない。犀水はこの批評をとおして、山下が外国の美術潮流の単なる追従者ではないことを読者に示そうとした。

次に、本記事の特徴である山下のロングインタビューに着目する。山下はインタビューのなかで、後期印象派や未来派を「ほんの一部分に起つた運動」「ポストアムプレシヨニストにも好い所はあるが、それが絵の全体ではない」⁽³⁵⁾と述べた。山下は、同時代の外国と日本の状況を比較し、文展を中心とする既存の美術界が倒れた後に美術界全体が前衛芸術へと進展する一辺倒な潮流変化は不自然だと指摘したのだ。

筆者は、この山下の発言がインタビューへの回答であることをふまえて分析する。インタビュアーはおそらく本記事執筆者の坂井犀水である。インタビューの回答にインタビュアーの質問・取材の意図が入り込むことをふまえると、この山下の指摘をインタビュアー・坂井犀水の狙いと読み替えることもできる。つまり、坂井犀水はこのインタビューをとおして、日本の美術界全体が前衛芸術へと移行する問題を読者に提起しようとした。

おわりに

雑誌『美術新報』誌面からは、十分に議論がなされないまま美術の潮流変化が起こり得る 1910 年代当時の日本の美術界に対する危機感が読みとれた。看板連載に掲載した作品・作家批評の分析からは、同誌編集主幹にして看板連載執筆者の坂井犀水が外国の美術潮流に対する短絡的な画風の模倣や表層的な潮流への追従を戒めようとしたこともわかった。筆者は、雑誌『美術新報』の作品・作家批評を通じて日本国内の美術界全体がひとつの芸術潮流へと傾倒していくことの問題を読者に提起したと結論づける。

今後の課題のなかでは特に雑誌『美術新報』看板連載全ての分析を喫緊と考える。本シリーズ連載は「現今の大家」からはじまり、第 1 回吉田博、第 2 回黒田清輝そして第 3 回に寺崎広業 (1866-1919) をとりあげている⁽³⁶⁾。本発表では 20 世紀初頭の西洋画界の潮流変化を論じたが、今後は日本画界を含む日本美術界全体に対する『美術新報』の構えを考察した上で、同誌が展開した作品・作家批評の分析を試みる。

さらに他の新聞・雑誌記事に対する『美術新報』の応答・引用を検討し、当該期における美術批評の言説空間の生成を明らかにしていく。

今日、美術批評の主要な舞台はインターネット空間へと移りつつある。だからこそ、美術批評の言説空間を立ち上げた最初期の場としての新聞・雑誌が同時代の美術界や社会に果たした役割を明らかにしたい。

註

(1) 『美術新報』は刊行期間に 3 度編集部が刷新された。第 1 期：創刊から 1903 年までを小原大衛 (生没年不明) がつとめ、その後主幹が定まらない時期を経て、第 2 期：1909 年から 1915 年までを岩村透と坂井犀水が、第 3 期：1916 年 1 月号から 3 月号を児島喜久雄 (1887-1950) と矢代幸雄 (1890-1975) が、そして 1916 年 4 月から廃刊まで大隈為三 (1881-1961) が中心となって雑誌を刊行した。新聞のような体裁の隔週刊誌からはじまり、岩村、犀水によって月刊誌に改められた。一時、児島、矢代によって学術雑誌のような形式になり読者の不評を買ったが、大隈が立て直した。それでも岩村、犀水による第 2 期ほどの勢いはなく、読者が離れていった。

雑誌『美術新報』が提示した同時代美術・美術家像

- (2) 五十殿利治『観衆の成立——美術展・美術雑誌・美術史』東京大学出版会、2008年に詳しい。
- (3) 例えば内田魯庵も熱心な読者のひとりだった。『美術新報』1913年9月、12巻11号、16頁。
- (4) 『美術新報』1910年8月、9巻10号、15頁。
- (5) 朴昭炫『「戦場」としての美術館——日本の近代美術館設立運動／論争史』ブリュッケ、2012年。
- (6) 今橋映子『近代日本の美術思想』白水社、2021年、同「雑誌『美術新報』改革と岩村透・坂井犀水：大逆事件とポスト印象派の時代に」『超域文化科学紀要』2014年、19号、176-137頁他多数。
- (7) 『美術新報』1909年11月、9巻1号。
- (8) 『美術新報』1909年12月、9巻2号、1頁。
- (9) 「時言」『美術新報』1910年1月、9巻3号、1頁。
- (10) 「時言」『美術新報』1910年12月、10巻2号、2頁。
- (11) 「時言」『美術新報』1912年7月、11巻9号、1頁。
- (12) 「時言」『美術新報』1913年12月、13巻2号、1頁。
- (13) 「時言」『美術新報』1915年11月、15巻1号、1頁。
- (14) 今橋前傾書「第12章3.〈時言〉の構造」『近代日本の美術思想（上）』2021年に詳しい。
- (15) 坂井犀水「時言・審査員精選論」『美術新報』1911年11月、11巻1号、1-2頁。
- (16) ドイツ・ベルリン留学後に齋藤佳三と山田耕筰（1886-1965）が持ち帰った作品を中心とした展覧会。1914年3月に日比谷図書館にて開催された。
- (17) 齋藤佳三（談）「表現派と立法派と未来派」『美術新報』1914年4月、13巻6号、31頁。
- (18) 今橋は「国民美術協会の母体の一つが、雑誌『美術新報』の人脈であった」と指摘している。前掲書「第15章3.1910年代日本の美術界での意味」2021年、161頁。
- (19) 今橋前掲書「第10章4.1910年という転機（2）ポスト印象派の時代に」2021年。
- (20) 坂井犀水「新時代の作家（七）山下新太郎氏」『美術新報』1912年9月、11巻11号、2頁。
- (21) 瀧悌三「二科七十年史 物語編」『二科70年史1914-1943』二科会・日本経済新聞社、1985年に詳しい。
- (22) 坂井犀水「言論を尊重し斯界の公然を實行するの美風を起せ」『美術新報』1914年3月、13巻5号、1頁。
- (23) 坂井犀水「言論を尊重し斯界の公然を實行するの美風を起せ」『美術新報』1914年3月、13巻5号、1頁。
- (24) 「生の芸術」論争については中村義一『日本近代美術論争史』求龍堂、1981年を、「絵画の約束」論争については中村義一『続日本近代美術論争史』求龍堂、1982年を参考にした。

- (25) 本記事は柏亭が渡欧する直前の1910年9月に掲載された。
- (26) 石井柏亭「方寸書架」『方寸』1910年、2月号、2-3頁。
- (27) 坂井犀水「吾人は固よりローカルカラーを以て、絵画の最も主要なる要素とは信じないけれども、それは能く画かれたる画には、多くの場合に於て自ら現はれ来るべきものと思ふ」「ローカルカラーに絶対の權威を献ぐるものではないが、それが巧に或画に表現せられた場合に之を賞翫するに吝なるものではない」「現今の大家（九）石井柏亭氏」『美術新報』1910年9月、9巻11号、3頁。
- (28) 坂井犀水「卓越愚論・高村光太郎氏（スバル）「緑色の太陽」」『美術新報』1910年5月、9巻7号、16頁。
- (29) 坂井犀水「新時代の作家（一）南薫造氏」『美術新報』1912年1月、11巻3号、2頁。
- (30) 坂井犀水「新時代の作家（一）南薫造氏」『美術新報』1912年1月、11巻3号、2頁。
- (31) 坂井犀水「新時代の作家（一）南薫造氏」『美術新報』1912年1月、11巻3号、3頁。
- (32) 坂井犀水は石井柏亭の作品に対して「最近の氏の作には常に自家の趣味に基いて自然より選択し省略したる独特の面目がある。其作には模倣の痕がない。そして又た毫も匠気がない山気がない、それが最も心持が佳い」と評価していた。「現今の大家（九）石井柏亭氏」『美術新報』1910年6月、9巻11号、4頁。
- (33) 坂井犀水「新時代の作家（一）南薫造氏」『美術新報』1912年1月、11巻3号、4頁。
- (34) 坂井犀水「新時代の作家（七）山下新太郎氏」『美術新報』1912年9月、11巻11号、2頁。
- (35) 坂井犀水「新時代の作家（七）山下新太郎氏」『美術新報』1912年9月、11巻11号、4頁。
- (36) 「現今の大家」全18回、「新時代の作家」全8回、「現今の作家」全6回。

